Column

KIDS CLOWN

天使の笑顔が見たいから。
クラウンになった、ひとりの若者の物語。

VOL.5 カナダのキッズクラウン達 2

クラウンを通して見えた子どもの世界

玉井良平 Ryohei Tamai

短大卒業後、2004年にオーストラリアでクラウン（道化師）に出会う。帰国後、保育園に勤務する傍ら、子どもたちの創造力の向上を目指してクラウンを学んでもらう、キッズクラウン講座を立ち上げる。10年にカナダに渡り、日系の子ども達を対象に行なった同講座も好評。今回、クラウンを通して得た体験を初めて執筆。日本のキッズクラウン達を連れて、カナダで海外公演をする事が新たな夢となっている。
www.child-entertainment.net

キッズクラウン講座を受講したミシサガそろばん教室の9名の生徒達は、そのほとんどが小学生だった。彼らは、「マジック」や「バントマイム」などの技術の習得に目を輝かせた。興味を示すジャンルも年齢層も全く違うので、頭を抱えた事もあったが、興味があるものに対しての集中力は凄まじいものがあった。

彼らはいわゆる「ギャング・エイジ」と言われる年代の真っただ中で、大人と距離を置き、子ども達同士で遊び、彼らだけの社会を創り、来るべき思春期への準備をしている最中だった。

そんな彼らが僕に見せてくれた瑞々しい感性、世界観。時に不器用にも映るストレートな言葉に何度も

考えさせられ、その度に講座の内容を一から創り直した。彼らと共に走り抜けた素晴らしい3か月をここに紹介したい。

彼らは提示したワークが気に入らなければ、「恥かしい」「やらない」と言ってはっきり自己主張をした。そこで終わっていたのなら途方に暮れていたところだが、驚いた事に彼らは、自分達の気に入るようにアレンジする能力を持っていた。僕が提示したショートコメディを自分たちに合ったスタイルに変えてしまう事が度々あった。が、それはそれでとても面白く、ユーモアがあったので彼らに任せて自由にさせた。

そんな時の、彼らの表現力には目を見張った。独創性溢れる世界観にいつの間にか引き込まれ、「ハッ」とさせられることも少なくなかった。

反面、個性が強く異性を意識し始める年頃だっただけに、男女間でよく衝突を繰り返していた。だがその光景は、かつては自分が通ってきた道。ハラハラしながらも、とても微笑ましく思えた。その中で彼らは見事な「団結力」を育んでいった。

そんな彼らの最後の発表会では、彼らが好きなものを選択し創り上げてきた〝オリジナル〟を見てもらうことにした。ただ、彼らの「やりたいこと」の要望は一見「とても無理だ」と思うことが多く、「6人でマジックがやりたい！」と言われた時は、苦笑いをするしかなかった。だが、不思議な事にそれを苦に感じる事はなかった。むしろ「不可能だ」と思う様な意見や要望を主張する、そのずば抜けた発想力を楽しく感じる自分がいて何だか不思議だった。

発表会当日、学校から帰ってきた子から順にメイクにとりかかった。興味津々にメイクを覗き込む子ども達。最初は拒否していたのに「やっぱりやりたい！」と言ってきた子や、自分から「面白い顔にして！」と言ってきた子もいて、何だかとてもおかしかった。

悩み抜いた「6人マジック」だが、紙袋に入れた風船が取り出す時には色が変わっている「風船の色変えマジック」を6人でやることにした。簡単そうに見えて、実は難しいこのマジックは、何でもやってしまう彼らをも苦しめた。若干あたふたした場面もあったが、小学生とは思えぬアドリブも飛び出し、その場を切り抜けた。

子どもは「天才」だ、と言われることがあるが、彼らを見ていると「その通りかもしれない」と思う事がある。こちらが予想だにしない発想力で自分の世界に引き込んでしまう。そんな彼らしい独創性に満ちたショーだった。

bits トロントNo.1情報誌bitsは
毎月第1・第3金曜日発行
www.bitslounge.com